

事例研究

位野木 万里

東芝ソリューション株式会社

IT技術研究所 研究開発部 システム開発・構築技術ラボラトリー

要件定義の生産性を向上させるための最適化への取り組み

講演概要

要件定義においては、要求獲得、要求記述、要求検証、要求管理のプロセスで構成され、さまざまな研究成果が提供されている[1]。例えば、変更要求を意識した要求獲得計画の立案に対しては、要求の成熟度に着目したPRINCEモデルが提案され、要求獲得計画の立案に貢献しつつある[2]。

著者の所属する組織においても、PRINCEモデルを用いて、要件定義をスムーズに行うことに取り組んでいる。しかしながら、発注者からの要望を可視化しステークホルダ間で合意を得る要件確定プロセスにおいて、次のような課題に直面した。

- (1) 要望の起票方法が属人的であり要望の理解・確認にコスト発生
- (2) 要件化の方法が属人的であり、重要な要望と、運用でカバーできる単純な要望の区別なし
- (3) 要件の定義時期が特定時期に集中し作業効率が悪化

そこで、上記課題の解決のために、PRINCEモデルが提供する要求の分類とそれに基づく優先度決定ルールを用いることで、要件定義プロセスを最適化する手法の開発と適用を試みた。(1)の課題に対しては、要望の仕様記述基準を定義した。(2)の課題の解決には、PRINCEモデルが提供する要求の分類に基づき、優先度ルールを定義した。そして、(1)と(2)の課題の対策に基づき要件定義の業務フローを可視化し、関係者に徹底することで(3)の課題に対応することを考案した。

上述した解決策を実システム開発に適用した。本解決策の実施後、要件確定のリードタイムを平均1.15日に、要件確定のコストを従来より80%削減することができた。リードタイム短縮および要件確定コスト削減を実現できたことから、考案した手法は有用であることを明らかにした。今回は要求の抽出数と時期を観測し、優先度を決定するための、共通のものさしとして、すでに実績のあるPRINCEモデルを活用した。考案した手法は、あらゆるシステム開発でも汎用的に適用と考えられ、知識継承にも貢献できる。今後は、複数のシステムでの観測を通してデータを蓄積し、本手法を継続的に改善していく。

【参考文献】

[1] 大西淳, 海谷治彦, 中谷多哉子, 佐伯元司 ウィンターワークショップ・イン・金沢報告要求工学, 情報処理学会研究会報告 56:87-89, 2001

[2] 産学戦略的研究フォーラム, 統合型要求プロセス研究プロジェクト, PRINCEモデル(The PRINCE Model)ー統合型要求プロセスへのアプローチ, 2010

S3b

7月28日

11:30~12:15

会議室B